

## 中国ムスリム・エリートにおける「回」 ——清末民初の時期を中心に——

山崎 典子

### 概要

「回」は漢語で歴史的にイスラームを意味する語であり、漢語を話す内地のムスリム(「漢回」)や新疆に居住するテュルク系ムスリム(「纏回」)をはじめとするムスリム諸集団の総称でもあった。だが、現在中華人民共和国では、「回」は回族の民族名称にのみ用いられ、イスラームを信仰する10の少数民族は、ウイグル族、東郷族など個々の民族名で呼ばれている。従来の研究では、このように「回」の意味が転換した理由を考える際、中国共産党による民族識別工作の影響力を重視してきた。そこでは、「回」をめぐるムスリム自身の意識が十全に顧みられてきたとは言い難い。しかしながら、〈民族〉という概念が中国に紹介され「五族共和」が喧伝された清末民初の時期には、すでにムスリム・エリート(知識人、宗教指導者、教育家など)たちが、「回」や「民族」をめぐる興味深い議論を繰り広げるとともに、「回」の地位向上を求めて国家との関係を模索していたのである。

そこで、本報告では、20世紀初頭のムスリム・エリートにおける「回」認識の展開を多角的に考察することにより、中国を中心とする近代ユーラシアの〈民族〉概念形成史の一側面を示すことを試みた。史料としては、当時華北ムスリム社会で読まれていた『正宗愛国報』*Zhengzong Aiguobao* や『醒回篇』*Istīqāz al-Islām*をはじめとする新聞・雑誌を中心に、中国の政治家や知識人の著作、台湾国史館所蔵の档案資料などを用いた。

### 議論の内容

報告前半部分では、清末のムスリム社会の諸相を整理した。19世紀後半に発生したムスリム反乱により疲弊していた西北や雲南のムスリム社会とは対照的に、20世紀初めの華北ムスリム社会では、王寛や張子文ら宗教指導者が中心となってイスラーム改革運動を推進し

ていた。また、都市部ではムスリム知識人による新聞が相次いで刊行され、ムスリムの公的な言説空間が形成されていった。一方で、当時の中国ムスリム社会では、ハラールの問題をめぐる漢人との文化摩擦、改革派と保守派の対立、「愛国意識の欠如」(キリスト教宣教師 Broomhall の記録による)といった問題が山積みであったことが、諸史料からわかった。なお、中国旅行中に王寛と親交をもったロシア出身のタタール人ウラマー、アブデュルレシト・イブラヒム Abdürreşid İbrahim は、旅行記『イスラーム世界と日本におけるイスラームの普及』*Âlem-i İslâm ve Japonya'da İntişâr-i İslâmiyet* のなかで、中国ウラマーの知的水準の低さやその頑迷固陋な姿勢を鋭く批判している。

続いて、後半部分では、まず、清末民初のムスリム・エリートにおける「回」認識を考察した。その結果、「回」をめぐる 20 世紀初頭のムスリム・エリートの立場は大きく二つあったことがわかった。第一に、「漢回」の「民族」性を明確に否定する立場。これは、1907 年に東京で留東清真教育会を結成し『醒回篇』を刊行したムスリム留学生、『正宗愛国報』関係者などに見られる見解である。彼らは、内地ムスリムは「民族」ではなく漢人の宗教集団に過ぎないこと、「回族」とは新疆の「纏回」のみを意味することを主張した。

第二に、中華民国成立直後から、「漢回」は「纏回」とともに「回」を構成するという立場が、王寛らが設立・運営に携わった中国回教俱進会、北京伊斯蘭教務討論会のエリートたちに顕著に見られるようになった。彼らは「五族共和」における「回」を「回教徒」と倒置することで、「漢回」が「纏回」と同じ「回」であると考え、政府の命に従い「纏回」を懐柔することによって、国家における「回」の地位向上を目指した。たとえば、1913 年に蒙蔵事務局から刊行された『回文白話報』や『正宗愛国報』、同時期にロシアで発行されていたタタール語新聞 *Vaqt* の記事によれば、王寛らは新疆のムスリム有力者に民国への協力を求める手紙を幾度も送り、それに対して彼らは好意的な反応を示した。その功績により、王寛らは政府から褒章を授与したのだという。

このように、清末民初期のムスリム・エリートの「回」認識は一枚岩ではなく、紆余曲折を経て多様な「回」のあり方が追求されていたのである。もっとも、彼らの「回」認識や「民族」観は概して曖昧模糊としていた。「漢回」と「纏回」の共通性を主張した王寛らでさえ、「漢回」が「民族」であるとは決して明言しなかったのである。このことは、1920、30 年代以降、「回」や「民族」の定義についてエリートたちが侃侃諤諤の議論を行い、それぞれに明確な立場を表明していた状況とは対照的である。しかしながら、清末民初の時期には、新疆のテュルク系ムスリムを「啓蒙」しようという意識、「漢」とは異なる「われわれ」意識といった感情から、おぼろげながらも「回」アイデンティティの輪郭が形成されていったのだと考えられる。

歴史学者のフェルナン・ブローデルは、中国ムスリムをいみじくも「取り返しのつかないほど迷子になった子どもたち」にたとえた。このような「回」認識の「迷い」や曖昧さこそ

が、中国ムスリム史上における清末民初という時代の特殊性であったと言えるだろう。

(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程

・日本学術振興会特別研究員 (DC1))